二〇一四年一二月一七日（参加者一五名）

六時堂古色深めてしぐれけり　菜々
しぐれ傘傾げ行き交ふ詣で道　菜々
引導の鐘の余韻に秋思憑く　菜々
引導の鐘の余韻に秋惜しむ　満天
とりどりの毛糸帽子や水子仏　満天
しぐるれば機嫌の悪し摩尼車　満天
極月や路地に溢るる見切品　宏虎
餓鬼大将いま好々爺日向ぼこ　宏虎
お地蔵に洩らす願いの息白し　ひかり
亀池に亀の見えざる寒さかな　ひかり
義士の墓訪ひしマスクの一と屯　よう子
しぐるるや托鉢僧の閉じ瞼　よう子
刀衝き矢衝き義士像凍てにけり　よし子
しぐるるや土塀づたひに寺の町　よし子
寺の鐘間遠に聞こゆ冬木立　わかば
クリスマス母の白寿を祝いけり　わかば
星吊るし谷戸の電車もクリスマス　うつぎ
雨が打つ義士の墓の上冬木の芽　うつぎ
一病の機嫌とりつつ落葉掻く　有香
長椅子にマスク老人勢揃ひ　こすもす
着ぶくれて一人はみだすベンチかな　明日香
悴む手おもかる文殊胸に抱き　つくし
居眠るも不即不離なる番鴨　はく子
岩陰に見えつ隠れつ浮寝鳥　ぽんこ

定例句会みのる選

二〇一四年一二月一七日（参加者一五名）